

# NEWSLETTER #114

## JASPM 第 29 回大会告知

- p.1 追悼 ポール・オリヴァ氏 逝去……………三井 徹  
p.2 2017 年度第 2 回関東地区例会報告……………周東 美材

### information

- p.4 事務局より

## 追悼

### ポール・オリヴァ氏 逝去

三井徹

ブルーズ研究の第一人者であり、IASPM (国際ポピュラー音楽学会) が 1981 年に発足した時からの会員であった英国人ポール・オリヴァ氏が 8 月 15 日に 90 歳で亡くなられた。

1960 年刊の *Blues Fell This Morning* に始まる 60 年代の 3 冊のブルーズ書が、各国の愛好者と研究者に多大な影響を及ぼしたのに続いて、オリヴァ氏は 1970~1971 年に、英米の若手研究者の執筆を中心にした 14 冊から成る *Blues Paperbacks* シリーズを監修した。

オリヴァ氏を日本にお招きしたのは、1997 年 7 月に金沢で開催の IASPM 第 9 回大会に際してであった。五日間のその大会の初日に金沢大学で合同開催した JASPM 大会も第 9 回であったのは、IASPM の大会は隔年開催であることによる。その折に五箇山の合掌造り集落へオリヴァ氏をお連れしたのは、ご本人の希望によるもので、その合掌造りが世界文化遺産に指

定されたのが 2 年前の 1995 年だった。オリヴァ氏の本務は建築研究であり、あとで知ったことだが、丁度その 1997 年に、オリヴァ氏が編纂した全 3 巻の *Encyclopedia of Vernacular Architecture of the World* が出たのだった。五箇山へご一緒した夫人のヴァレリーさんは 5 年後の 2002 年に亡くなられた。

IASPM 第 9 回大会でのオリヴァ氏の発表は “*Been all through the nation...*” で、『現代詩手帖』1997 年 10 月号に掲載の拙訳には「アフリカ系アメリカ人と先住民アメリカ人：交錯問題」という題を付けた。同大会の主題は「異文化間の解釈」だった。

遠く隔たった地球のこちら側からオリヴァ氏のご冥福をお祈りする。

(三井徹)

## 第2回関東地区例会報告

周東美材

### 卒業論文・修士論文報告会

日時: 日時: 2017年7月22日(土)14:00~17:00

於: 大東文化大学板橋キャンパス3号館106・107

報告者:

中村洸太(一橋大学大学院社会学研究科)

増田久未(東京音楽大学大学院音楽研究科)

竹中雄亮(新潟県立大学院国際地域学研究科)

北村心平(武蔵大学大学院人文科学研究科)

今回の例会は、卒業論文・修士論文の構想発表会であり、学会ホームページで事前に報告者を募集した。学会外から修士課程の大学院生 4 名からの応募があり、修士論文執筆を控えた若手研究者を中心に、多様なテーマの研究が報告された。

### 1. 「ポピュラー音楽に潜む大衆性と社会変革のアポリア —新宿西口フォーク集会を中心に—

中村洸太(一橋大学大学院社会学研究科)

新宿西口フォーク集会についての従来の研究は、社会運動、もしくは音楽実践のいずれか一方の面から考察されていたことを、中村氏は指摘する。前者の場合では運動の手段である音楽について、「なぜ社会運動の場に音楽が用いられたのか」が問われていないこと、後者の場合では運動の目的である社会変革について、その度合いが音楽シーンと運動内部で異なっていたことを等閑視してきた点に問題があったという。

中村氏は、後者の研究の乗り越えを試みるため、雑誌『フォークリポート』に掲載されたフォーク・ソング運動に関する批判記事を分析していく。その分析によれば、フォーク・ソング運動に関する批判には、当事者・有識者からの批判と、聴衆・観衆からの批判の2つの側面があった。フォークゲリラが政治性を先鋭化させていくのに対して、ミュージシャンや音楽評論家などの側は、音楽的な深化や運動方法のアップデートを唱えていた。他方、観客・聴衆の側は、「娯楽」である音楽に過度な政治性が付与されることを拒み、次

第にフォーク運動の要諦であった社会変革の理念を放棄していったという。

中村氏の報告に対して、フロアからは分析対象となっている雑誌『フォークリポート』の発行状況や影響力、編集方針がどのようなものだったのかといった資料の特性に関する質疑がなされた。また、「フォーク音楽」「フォーク・ソング」の概念に混乱が見られること、先行研究に対する本報告の位置づけが必ずしも適切ではないこと、本研究が最終的に何を明らかにするものなのかが明示されていないことといった、問題設定の構成の仕方に関する指摘がなされた。さらには、音楽の「実践」を考察しながらも言説分析に偏っており、音楽自体や身体性に関する分析が見られないといった方法論に関する不満も述べられた。

### 2. 「日本におけるガムランの活動に関する一考察—その 変遷と現状分析をもとに—

増田久未(東京音楽大学大学院音楽研究科)

本報告は、日本のガムランをめぐる活動に関する歴史的背景を踏まえ、各ガムラン団体の活動状況の調査、分析結果から諸問題および課題を導き出すことを目的としたものである。1973年に東京藝術大学に導入されたのを契機に、ガムランが一般の人々の目に触れる機会も増え、日本人によるガムランを使用した教育や演奏の意義も認知されてきた。しかし、ガムラン団体の活動には栄枯盛衰もあり、ガムランが世代を超えて受け継がれているわけでもないという。このような状況に対して、増田氏は、ガムランの楽器の活用方法やガムラン団体のあり方には見直しが必要な時期となっているとの知見を示す。

日本のガムランの普及過程と活動に関する増田氏の調査によれば、(1)教育実践現場における指導方法の問題、(2)真正性の追求の重視による一部の人への偏向、(3)ガムランやインドネシア文化に関する情報ネットワークの未構築という3点が、現場での課題として見出されるという。また、楽器が実質的に休眠状態になっていることや指導者が不足していること等により、ガムランが日本に定着していない現状が説明された。

増田氏の報告に対して、本報告は伝承基盤の確立を訴えてはいるが、そもそもなぜガムランを定着させなければならないのか、研究の「問い」以前の「思い」に自覚的になるべきではないか、といった問題意識の共有をめぐる質疑がなされた。また、休眠状態に入っているといっても、その活用法は必ずしも演奏ばかりではないこと、また、ガムランが導入された際のそれぞれ歴史的状況や政治的文脈を整理したうえで現状を分析する必要があることなど、報告者は自明の前提としている認識枠組みをより反省的に検討すべきであるとの指摘も続いた。

### 3.「1980年代における連鎖的なチャリティー・ソング制作の興盛を誘発した諸要因についての考察—南北問題が音楽家らに与えた影響」

#### 竹中雄亮(新潟県立大学院国際地域学研究科)

本報告は、欧米を中心に興盛した、複数の音楽家による一連の連鎖的なチャリティー・ソング制作の動向が、なぜ1980年代半ばに誘発されたのかを明らかにするものである。竹中氏は、分析の方法としてカスケード理論やコーズ・マーケティングの理論を批判的に検討し、それを踏まえて南北問題に関する諸研究に注目することで、新たな展望が切り拓けるといふ。

1960年代、発展途上国は、投資の輸入によって工業化を目指し、経済格差の是正を試みた。しかし、経済成長に成功した国は少数であり、1970年代の石油危機は途上国と産油国とのあいだの格差を拡大した。南北問題は、経済的優位にあった欧米の音楽家およびその活動の支持者に多大な影響を与えた。そのなかで、音楽を通じて民衆の経済的余剰を募るチャリティー・ソングを積極的に作り、聞き、歌おうという意識が広く醸成されていったという。

竹中氏の報告に対して、「チャリティー」あるいは「チャリティー・ソング」の定義を再考する必要があること、録音物だけでなくライブも対象として含める必要があることなど、研究対象のとらえ方に関する指摘がなされた。また、南北問題の影響という論点については、やや平板な印象を受け、それを超えた別の要因、たとえば音楽産業内部の質的な変化、MTVやデジタル化といった技術革新、チャリティーという名目として得られる権利上の利得などの問題に注目する

必要性が指摘された。むしろ、より本質的な問題設定としては、「1980年代のチャリティー・ソングなるものは、なぜいつもそのように語られてしまうのか」という点にあるのではないかとといった提案も、フロアからは上がった。

### 4.「クラブカルチャーを通してみる個人化と共同の往復関係」

#### 北村心平(武蔵大学大学院人文科学研究科)

本報告は、クラブに通うオーディエンスの語りから、クラブ空間における経験やコミュニケーション、趣味嗜好の共有について検討していく。まず、クラブ・カルチャーの歴史的背景や日本におけるクラブの文化的特徴について概観され、次に、フィールドワークの成果が分析される。

北村氏の調査によれば、クラブの空間利用のあり方は、自由なダンス、大音響のサウンド、会話を介さないコミュニケーションなどを通じて曖昧な人間関係を経験し、そのなかで北村氏のいう「個人化と共同の往復運動」の契機が生じると分析される。また、ネット上の一定のフォロワーを背景に、自主レーベルや自主イベントなどを展開する「クルー」と呼ばれる団体が検討される。これによれば、ネット上で形成される緩やかな関係とクラブ空間のあいだには往復運動が見出され、入り組んだ「ポータブルな人格」に基づいてシーンが再構成されているという。

北村氏の報告に対して、用語の定義、研究手法、細かな表記、時間配分など、基礎的な事項をしっかりと詰めることの重要性が指摘された。また、報告の後半では、クラブにおけるスマートフォンやSNSを介したコミュニケーションについて言及されていたが、SNS研究の参照が不足しており、そのため、SNSを介した他のコミュニケーションとクラブにおけるコミュニケーションとの違いが何なのかが不明瞭であるとの批判も続いた。さらには、スマホやSNSの使用によって、かつてのクラブ・カルチャーが大きく変化したとは言い難く、それらは必ずしも本質的な研究課題ではないのではないかと、むしろ、場を共有することの身体感覚こそが、重要な問題なのではないかといった、問題意識の根幹に関わる論点も提起された。

今回の関東地区例会では初めてウェブ上で応募者を募集し、若手が参加できる機会を積極的に設けた。さまざまな大学で、ポピュラー音楽を研究テーマとした卒業論文・修士論文が認められるようになったのは大変喜ばしいことである。しかし、対象への向き合い方、問題設定や論文の構成の仕方などの専門的な研究指導が、すべての大学で十分になされているわけではない。今後も引き続き、志ある若手がより質の高い論文を執筆できるよう、このような発表の場を設けていく必要があるだろう。

(周東美材)

### ◆information◆

## 事務局より

### 1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol. 1～Vol. 11 のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGE におきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaspmjms1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在する Vol. 11 までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております（ただし送料はご負担いただきます）。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方（非学会員の方でも結構です）は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていない Vol. 12 以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

### 2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1,000 字から 3,000 字程度が望ましいで

す。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回（2 月、5 月、11 月）の刊行、紙面で年 1 回（8 月）の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDF で発行されたニュースレターは JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

([http://www.jaspm.jp/?page\\_id=213](http://www.jaspm.jp/?page_id=213))

8 月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様に PDF により掲載しております。次号（115 号）は 2018 年 2 月発行予定です。原稿締切は 2018 年 1 月 20 日とします。また次々号（116 号）は 2018 年 5 月発行予定です。原稿締切は 2018 年 4 月 20 日とします。

投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニュースレター担当 ([n1@jaspm.jp](mailto:n1@jaspm.jp)) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

### 3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 ([jimu@jaspm.jp](mailto:jimu@jaspm.jp)) まで郵便または E メールでお知らせください。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。例会などのお知らせは E メールにて行っております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

### 4. 会費請求と会員のメールアドレス問い合わせについて

2017 年 3 月に、2017 年度の会費請求書類を、学会誌 Vol. 20 (2016) と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。学会誌は 2016 年度の会費納入者にお送

りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします（会費納入後速やかに会誌を送付いたします）。

なお、会員の皆様には、電子メールにて随時、学会からのお知らせ「JASPM メールニュース」をお送りしておりますが、最近、メールが不着となる会員の方が増えております。そのため、会費請求書類とあわせて、会員の皆様に最新のメールアドレスの問い合わせに関する書類を同封しております。メールニュースが届いておられない会員の皆様につきましては、ご留意の上ご回答いただきましたら幸いです。

**JASPM NEWSLETTER 第114号**

(vol. 29 no. 4)

2017年11月30日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会（JASPM）

会長 小川博司

理事 青木深・井手口彰典・井上貴子・大和田俊之・川本聡胤・谷口文和・増田聡・安田昌弘・山崎晶

学会事務局：

〒606-8588

京都市左京区岩倉木野町137

京都精華大学

安田昌弘研究室内

jimu@jaspm.jp（事務一般）

nl@jaspm.jp（ニューズレター関係）

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士